

NETXCOの東日本がお届けする
「鬼平江戸処」の魅力（その参）

江戸の暮らじを魅せる、 江戸の売り声

物売りの声で 江戸にタイムカブリッ

江戸の町ではたくさんの音が聞こえていました。人々の話し声はもちろん、四季を感じさせる風鈴の音や虫の鳴き声。そして、何よりも江戸の町を活気づけていたのは、物売りたちが発する特有の売り声でした。「鬼平江戸処」では、まるで江戸の町にタイムトリップしたかのようにそれらのさまざまな売りを聞くことができます。この売り声を演じるのが宮田章司さん。寄席芸として「江戸売り声」を演じる、日本でただ一人の漫談家です。

「なつと、なつとおー、なつと、なつとーみそまめ」元は大道芸をやっていた師匠から受け継いだ芸なんです。ある日、その売り声を聞いた瞬間、子どもの時の懐かしい景色がすうっとよみがえって、おまけにそれを通り越して江戸の町の景色にまでプレイバックしちゃった。納豆やアサリの売り声から一日は始まって、夕暮れ時には豆腐や魚売りの声が響く。鍋や傘の修理にも来てくれる。暮らしに必要なものやサービスが、天秤棒担いで向こうからやってくるんだから、ほんとに江戸はいい町でしたよ。私なんか、今でも本気に思ってる。江戸に生まれたかったって（笑）」

納豆売りや金魚売りなど一部のものは、昭和中ごろまで、町中で見られていました。その他の物売りについては、資料などから口上や文句を抜き出し、宮田さんご自身で節回しを付けていくのだといいます。

「活きの良さを感じさせたり、楽しい夕食を思わせたり、頼もしさを伝え

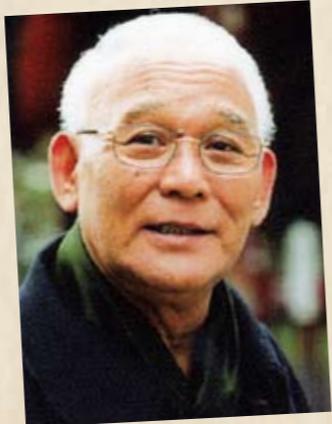
たり。町の景色にすんなりと溶け込む耳障りのいい音だけど、お客の注意をひきつけるようなちよつとした洒落っ気もある。それにはどんな節回しがいんだらう。そんなふうを考えていくと、時は経っているけど、江戸時代にも実際の物売りの人たちがやっていたこととまったく変わらないんですよ。」

宮田さんの解説によると、売り声は、室町時代の「芸商人」と呼ばれていた人々が、京の都の辻角やお寺の境内などで芸を披露しながら商いをしたことが始まりで、のちに江戸に伝わり発展していったのだといいます。

「だから、物売りは遊び心もサービス精神もたっぷりです。たとえば、油売り。お客が持ってきた容器に柄杓を使って油をゆつくりと注ぎ入れていくんですが、油はキレが悪いから注ぎ終わるまでに時間がかかる。その間、退屈させないように、お客と世間話をする。その様子がまるで仕事をさぼっているように見えた。これが「油を売る」の語源です（笑）」

平成25年12月、羽生パーキングエリア（上の線）が「江戸」をテーマに生まれ変わる。職人さんの力や識者の智恵を借り、細部にまでこだわった町をつくりあげよう。江戸の建物や土産品、町の賑わい、食、物、そして、人々のじくまや人情。開発に携わるクリエイターたちが明かす、「鬼平江戸処」の魅力。
第三回のゲストは、「江戸売り声」漫談家・宮田章司さんです。

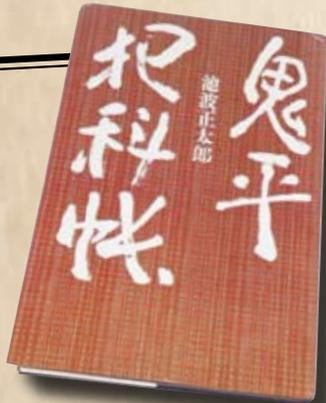
江戸が東京となり失くしてしまったもの。それを少しでも再現できた、というのが、「鬼平江戸処」の願いだ。「もちろん、今と比べるといろいろな不便もあつたけれど、ちゃんと四季を味わったり、人の情けを感じたり、昔の人は優雅でしたよ。休憩のためにひよいと立ち寄るパーキングエリアだけど、聞いたことのないような声を聞いて、あれ何だろう？なんて、ゆつたりとした江戸の風を味わってもらっただけでも優雅になれる。ドライブだって、ぜんぜん疲れ方が違いますよ。」



宮田章司（みやたしょうじ）

1933年東京生まれ。漫才師・宮田洋容の門下となり、同門の宮田陽司と「陽司・章司」の名前で漫才界にデビュー。以降、ラジオ・テレビ各局の演芸番組に数多く出演する他、歌手専属司会者、テレビ番組リポーター（11PM）日本テレビなどで活躍。その後、大道芸の坂野比呂志氏と出会い、江戸売り声の魅力に強くひかれ、寄席芸として完成させる。現在は、日本でただ一人の「江戸売り声」漫談家である。著書に『江戸売り声百景』（岩波アクティブ新書）、『いいねえ〜江戸売り声』（素朴社）がある。

鬼平の生きていた「間」の時間



世界的にも時間に正確な国として知られる現代の日本だが、江戸の町の「時のシステム」はどのようなものだったのか。当時は「種類の「時」があった。ひとつは太陽と「時の鐘」鳴らして時間を知る。もうひとつは生活時間である不定時法、もうひとつは主に御役目（公務）に使われた、「一刻の長さか一時間に固定された定時法だ。時の鐘は、「暮れ六ツ」とし、その間を六等分した。朝と夜がそれぞれ六刻で一日十二刻。一刻の長さは季節によって変化するが、平均で二時間。半分の一時間は半刻（ほんとき）と呼ばれた。現代は物事を「鬼思考」で捉えるが、江戸時代は「間思考」が一般的であった。これは時間感覚にも見られる。たとえ

ば、何時と指定されると現代人はその時間ぴったりを思い浮かべるが、当時は、たとえば「九ツ」「十二時」ならその間の二時間すべて（十一時から一時）を指していた。このため、時を告げる鐘の音を聞いてから動きだし、到着するのは三十分から一時間後。ぴったり来るに「間」を指して、この間を告げ終わるまで「間」と言い添えなければならなかった。

『鬼平紀科帳』の世界でもこの時刻に関しては、「ごろ」という言い方が多い。「押し込み」の時間を示し合わせるような場合もあるが、時計もないのにどのようにタイミングを計ったのかとちよつと疑問に思ふ。だが、そこは呼吸と間合い。現代の「点思考」をいったん脇に置き、登場人物の全員が共有する「間」の思考で考えてみると、最後の犯人捕縛への痛快な展開が、とてもスムーズで違和感のないことに気づかされる。

参考文献／『江戸の用語辞典』江戸人文研究会編、善養寺ススム文・絵（廣済堂出版）